

笠森お仙と隠元薬罐

西村俊範

はじめに

日本にお茶が伝来して以来、すでに1200年以上の歳月が経過している。茶の種類で言えば、そのお茶は一貫して不発酵の緑茶の系統に属する茶であった。ただし、その茶の種類は様々であり、時代的にも大きな変化が認められる。ただ、従前の日本の茶に関する研究は、抹茶を喫する茶道に関連するものにかかなり集中していた。近年は中世史研究の立場からの水準の高い論考も増えてはいるが、未だ近世には及んでいない。現在の我々の日常の喫茶法が何時、どのような経過で確立していったか、江戸期以降の庶民のお茶がどのようなものであったかについては、未解明の部分が大きいといえる。その空白を埋めるべく、庶民の喫茶法について今後考察を進めてゆきたいと考えているが、まず本稿においては江戸時代の喫茶の一面を、隠元薬罐という特色ある器物に焦点を当てて考察してみたい。隠元薬罐は、庶民の茶の質の向上を示すメルクマールとなるものなのである。

1. 笠森お仙

江戸時代には、江戸の街中に多くの茶屋・茶店があり、庶民にお茶を提供していた。17世紀にはまだ都市郊外の街道休憩所の茶店であったものが、18世紀に入ると江戸・京都・大坂などの都市部の市街化区域にも進出するようになり、まさに今日の喫茶店並みの溜まり場に成長していた。そのような店でお茶を給仕する係りは、画像を見ると、17世紀(江戸前期)には男



図1 「新色五卷書」
(元禄11年、1698)



図2 西村重長筆「やまとちや」
(東京国立博物館蔵)

性や年配女性が中心であったものが(図1), 18世紀(江戸中期)に入ると客引き宣伝の看板も兼ねて若い美人女性が積極的に登用されるようになった(図2)。中でも笠森お仙はその代表格と言える。⁽⁴⁾ しかも、彼女には多くの資料・絵画資料が残されていて時代の特定も容易で、庶民の茶の研究の上で極めて重要な存在となる。以下に、そのお仙を取り上げて考察したい。

お仙は江戸東北部の谷中(現台東区)の笠森稲荷の社前の茶屋・鍵屋に、宝暦の末ごろ(1763年ころ)に初めて姿を見せた。⁽⁵⁾ 店は父の五兵衛が始めたもので、明和元年(1764)13歳の頃には評判の看板娘に成長していた。お仙を一目見ようと参詣客が押し寄せた。これに目を付けた鈴木春信をはじめとする浮世絵師たちが彼女の姿を浮世絵に描いたため、お仙は広く東都に名を知られることとなった。明和5年(1768)には狂言芝居にまで登場して大当たりをとった。それが彼女の人気にさらに拍車をかけた。しかし、お仙は、明和7年(1770)2月に突如として19歳で結婚引退して、

茶屋から姿を消した。引退の事情を知らない人びとの間では、「とんだ茶釜が薬罐に化けた」つまり「すげえ美人の茶屋娘がなんとまあ薬罐頭の親父に代わってしまったよ」という俚言を流行らせることとなった。⁽⁶⁾

この1760年代のわずか10年に満たない期間に製作されたお仙の浮世絵は個人のものとしてはかなりの数に及ぶ。⁽⁷⁾ 鈴木春信だけでも30種に及ぶと言われている。その絵はあくまでお仙を描くことを目的としていて、茶屋の

様子は舞台背景でしかない。当然茶の状況を知る手掛かりとしては断片的であるが、浮世絵の内容を総合的・集積的に検討して当時の庶民の茶のあり様を見る手掛かりとして活用してみたい。どの絵も茶屋・鍵屋の一部しか描写していないが、総合してみると大体以下のようなだろう(図3・4)。

お仙の茶屋・鍵屋は笠森稲荷の鳥居前のすぐ脇にあり、屋号を書いた掛け行灯を吊るした小屋である。店先に長い床几台が並び、その台の一つに簡素な茶棚があり、へっついの上に釜が掛けられている。へっついとは四角の木枠のあるものと木枠のない隅丸型に描くものの2種の表現が見られる。どちらかが写實的に描いていない可能性がある。小台の上にこの店名物



図3 鈴木春信筆「笠森おせん」
(東京国立博物館蔵)



図4 一筆斎文調筆「笠森稲荷社頭図」(出光美術館蔵)



図5 一筆斎文調筆「かぎやおせん」
(早稲田大学演劇博物館蔵)

の米団子(お仙団子)を並べたものも描かれている。奥の小屋掛けの中では、床几台状のものをコの字形にしつらえている。鍵屋の全景が分かるものではなく、屋根構造も不明であるが、部分的に見えるものから推し量ると、ごく簡素な葺簀張りの小屋掛けと言える。

肝心のお茶に注目する。客に振る舞う茶は茶釜の中で作られており、柄杓で茶碗に直接注がれる(図5)。茶碗はいずれもかなり小ぶりに描かれている。むしろ茶碗を乗せる茶托の表現が不釣り合いに大きく感じられる。茶棚に並ぶ碗も同様である。この茶は、釜の中で長時間煎じられて「こげ茶」に近い色をした、今日の番茶に類似した「渋茶」と想定できる。いわゆる「黒製」の茶である⁽⁸⁾。黒製の茶は、製造過程で釜で炒るので、その後に揉捻しても成分の浸出は少ない。長時間釜の中で煎じる必要があった。北尾重政画の「かぎやお仙」画には、「梅が香をせんじそゆるやよしず茶屋」の句を添えている⁽⁹⁾(図7)。また当時の手まり唄では「・・・おせんの茶屋に、腰を掛けたら渋茶を出した・・・」と歌われており、この推察の裏付けとなろう⁽¹⁰⁾。少し時代が下がる18世紀末のものながら、歌川豊国の「風流三幅対・難波屋おきた」(図6)に、茶碗の内部を茶色く彩色したもの



図6 歌川豊国筆「難波屋おきた」
(東京国立博物館蔵)

⁽¹¹⁾があり、当時茶屋で供されていた茶が、かなり下等の「黒製」の茶であったことを実際の色でも確認することができる。鍵屋の茶も同様のものと考ええる。

2. 隠元薬罐

ところで、お仙の画像には、茶屋の釜の描写が第1章で述べたものとはいささか異なっているものが見受けられる。釜の蓋が取り去られて、上に金属製(銅)と思われる薬罐⁽¹²⁾が乗せられているものである。鈴木春信のものには二例しか確認できない。北尾重政⁽¹³⁾(図7)と一筆斎文調⁽¹⁴⁾(図4)のものにも見えている。印刷刊行物では、森嶋中良の『寸錦雑綴』所収の挿絵に転載された、お仙引退直前の明和6年(1769)刊の『風流娘百人一首見立三十六歌仙』の断片に辛うじて半分隠れた薬罐と釜を確認することができる⁽¹⁵⁾(図8)。お仙の図像に限らず、茶屋の釜の上に薬罐が乗る図像は、この明和6年のものが管見の限り初現となる。したがって、お仙の絵を最初に描くと同時に一番多く描きもした鈴木春信のものに例が僅少であることは、彼がその時々で



図7 北尾重政筆「かぎやおせん」(東京国立博物館蔵)



図8 「風流娘百人一首見立三十六歌仙」より



図9 日本堤の水茶屋(「青楼惚多手買」より)

実際に見たままを忠実に写實的に描いていた結果と理解して良からう。明和6年はお仙が引退する前年であり、お仙本人と薬罐が鍵屋で共存していた時間は、ほんの一年にも満たなかった可能性もある。茶店の図像は桃山時代以来数多いが、明和以前では釜の上に薬罐を乗せた図像例は見当たらない。一



図10 北尾重政筆
「桜川お仙」
(シカゴ美術館蔵)

方、明和の次の安永以後の茶屋では、薬罐は次第に見慣れた図像となって常態化してゆく⁽¹⁶⁾(図9)。薬罐のあるなし、つまり庶民の茶のありようの大きな変化を、まさにこのお仙の一連の図像の中に見出すことができるのである。

この薬罐は隠元薬罐と見て間違いのない。菊岡沾涼『本朝世事談綺』(享保19年、1734)の「隠元薬罐」の条には、「相伝ふ、隠元禅師、状をこのみ作らしめ、常に炉におかれけるとなり。或説に湯気薬罐と云うなり。罐子の蓋をさりて、その跡へ薬罐をすへて、下の茶の湯気をもて、上の素湯の沸ことを工夫して、是を湯気薬罐と名付となり。」とある。⁽¹⁷⁾

本来の隠元薬罐は唐茶(中国茶)を鍋で煎じることに関連するものであった。後段の湯気薬罐がまさにこの薬罐の詳しい説明となっている。「下の茶」という表現は茶屋の図像に照らしてまさに適切であり、下の釜ではやはり洗茶が相変わらず煎じられており、上の薬罐は本来お湯を沸かすためのものだったことがわかる。安永年間(1775年ごろ)の北尾重政筆の「桜川お仙の

図) (図10)に桜川お仙が湯気の立つ釜の中から茶碗に茶を汲みだそうとする図柄のものがある。⁽¹⁸⁾へっつい横には、取り外された薬罐が置かれている。釜の中で相変わらず渋茶が作られていたことは図像からも動かない。客に渋茶を呈する時には、いちいち薬罐を下していたわけである。重ねて述べれば、先述の難波屋おきたの図も18世紀末のもので、茶色い渋茶であった。

では、そもそもこの隠元(湯気)薬罐で沸かしたお湯の方は一体何に用いられたのであろうか。茶屋でわざわざ湯を沸かす以上、何らかの茶に関連するものとしか考えられない。残念ながら図像資料には、直接的にこの薬罐の湯を用いている状況を表したものが見当たらない。ただし、文献からはいくらかの推察が可能である。恕堂閑人『寛保延享江府風俗志』(寛政4年奥付、1792~)には江戸の茶屋の変遷を叙述して、「今の如く奇麗に成たる初は、芝切通しに一ぶく一銭とて、唐銅茶釜をたぎらかし、其蓋りんりんと鳴し、茶碗等より奇れいして、況や茶芦久保(静岡)、宇治等を用ひたる事也。夫より諸々沢山出来たる事也。延享(1744~48)の末に新橋朝日といへる見世出来、又其頃にしがらきなど出来て、此頃より下々にても上茶飲覚えて殊外はやり、・・・」⁽¹⁹⁾と記している。それまで粗末な作りだった茶屋が、18世紀も半ばにかかると次第に作りも上等になり、肝心の茶も芦久保(静岡)や宇治製の銘茶を出すようになったとある。この茶が先述の黒製の渋茶の類でないことは確実である。黒製の茶を下等な茶と考えて、それより上等の「上茶」というカテゴリーが考えられているわけである。延享の末、つまり1740年代後半には、有名な茶屋ができ、庶民層にも上茶が普及してきたと記される。従って、隠元(湯気)薬罐で沸かされた湯はこの黒製の茶とは異なるもう一種類の上等の茶、『寛保延享江府風俗志』の記述に見える芦久保・宇治などの有名産地の「上茶」を入れるために用意されていたと考えるべきであろう。供される茶が2種類に増えたことになる。その上茶を入れる具体的な方法は如何であろうか。まず大略二つの方法が想定できる。一つはこの沸騰した薬罐の中に茶葉を加える方法である。

大枝流芳の『青湾茶話』（宝暦6年、1756）の「淹茶（だしちゃ）」の条には、
「茶を沸湯の中に入れて火を以て煮ず、香気の発するを待つて飲む。世俗
に云う、⁽²⁰⁾ 隠元禪師始めて日本に此の法を伝う、と云えり。」とある。すな
わち、あらかじめ沸騰させたお湯を作っておいて、その湯の中に茶葉を入
れると同時に火からは降ろす方法である。その手法は日本在来のものでは
なく、17世紀に来日した隠元禪師がもたらした、当時の中国で行われてい
たいわゆる唐茶の飲み方であった。森川許六の『風俗文選』（宝永2年、
1705）の記事には、⁽²¹⁾ 「^{ぼく} 檗山禪師（隠元）来朝して唐茶の鍋煎を製す。世もつて
隠元茶と号す。これは是出し茶なり、それより首の長さ葉罐を作りて給仕
の小坊主をたすく、・・・」とある。すなわち、隠元が唐茶（煎じ茶ではな
い出し茶）を入れるにあたって、給仕の利便性を考えて首の長い葉罐を創始
して用いたと説明している。これは大枝の記述を補足するものと言える。
大枝と森川の解説はよく符合しており、問題の葉罐が「隠元葉罐」と、特
別に隠元の名を冠して呼ばれるようになった理由もあらかた理解できよう。
ただし、隠元は茶屋で行われたような茶釜の上に葉罐を乗せるやり方を考
案したとは記されていない。葉罐の用い方として、釜の上に乗せて湯を沸
かす手法には、⁽²²⁾ 隠元葉罐の使用法に一工夫を加えたまた別の考案者を想定
すべきであろう。

ただし、この方法では葉罐に入れる水の量次第では大量の上茶が出来上
がってしまい、個別の客の個別の注文に応じて呈するにはかなり不便にな
る。葉罐一杯の茶を飲む客は想定し難い。⁽²³⁾ 余っても再び釜の上に乗せてお
くことはできない。それでは再び煎じてしまうことになり、煮詰まって濃
く出て飲めない苦さの茶となるように思われる。ただし、宮紫暁の『常盤
の香』（寛政11年、1799）には、俳句の付合いで「葉罐茶のねぢきるばかり
いろぞ濃き 小ざさが中に松の常盤木」と詠むものがある。⁽²⁴⁾ 色濃く出した
緑色の上茶を葉罐でこしらえた可能性を否定できない。

もう一つの利用方法としては、小袋入りの茶葉を碗に入れて隠元葉罐で
沸かした湯を掛けて飲む方法が考えられる。喜多村信節の『嬉遊笑覧』

(1830年自序)の「辻売り煎茶」の条には、「せむ茶(煎茶)も宇治信楽の名茶は下さまの飲ことならざりしに、小袋の安売出一服一銭といふ茶店出しより、辻売りの名茶明和のころより通り町を始め所々に腰かけ茶屋多くなれり」と記している⁽²⁵⁾。つまり、問題の明和年間こ



図 11 豊原国周筆「怪談月笠森」(入間市博物館蔵)

ろから、今まで庶民はとても高く飲むことができなかった宇治・信楽などの名のある茶の小袋入りのものが安値で販売されるようになり、それを飲ませる茶屋もまた増加したという。これは、明和年間にお仙の茶屋に隠元薬罐が登場した理由の説明にもなっており、大変注目される記述であろう。この場合、茶葉を直接茶碗に入れることも可能性があるが、土瓶の使用も同時に考えられる。お仙を詠んだ明和頃の流行唄の摺り物に「飛んだ薬罐は吾妻の育ち、ぱっとかほるや濃茶の花香、飲んで今宵も浮された、
 ・ ・ ・ 吾妻育ちの名高きお仙、色を煎じちゃ飲み干す土瓶、元が土ゆへ割れたげな」と歌われている⁽²⁶⁾。かなり色濃く出た上茶が、薬罐ではなく土瓶のほうで入れられた可能性を強く感じる。ただし、土瓶はお仙の浮世絵には見当たらないという難点がある。前掲の大枝流芳の『青湾茶話』(1756年)に中国渡来の茶の用法として「武夷山の茶、まれに渡来す。得がたし。其の香、蘭に似たり。茶少し焙じて後、洗いて瓶に入れ、沸湯を入れる。」とある⁽²⁷⁾。土瓶は18世紀の第二四半期にすでに江戸で出現していることが発掘資料から確認されている⁽²⁸⁾。したがって、絵画資料では残念ながら確認できないものの、可能性として捨て去ることもまたできない状況にある⁽²⁹⁾。

この二つの方法のどちらが実際に用いられていたのか、あるいは二つの

方法とも並行して存在したのかは、図像的には確定できない。ただ、隠元薬罐を用いて作られたお茶が、間違いなく今までの茶色い色のお茶とは異なるものであることは図像でも確認ができる。豊原国周の「怪談月笠森」(慶応元年, 1865)⁽³⁰⁾(図11)では、土瓶(隠元薬罐代わり)が釜の上に乗し、茶棚の右には上茶の茶壺(茶入れ)が半分見えている。手前の女性が盆の上に乗せた小振りの茶碗の内面は黄色に近い浅緑色に塗られていて、これが茶の色を示している。掛け行灯には「せん茶屋」とあり、この上茶は当時すでに現在と同様に「せん茶(煎茶)」⁽³¹⁾と呼ばれていたと思われる。

お仙の茶屋に出現した隠元薬罐は、まさに庶民のお茶の移り変わり、もっと正確に表現すれば上質化・高級化を反映したものであったと言える。

3. 上茶の出現と普及

次に、隠元薬罐の話をもとにまず措いて、上茶そのものについて簡略にまとめしておく。現在我々が飲む、黄色に近い浅緑色をしたいわゆる「煎茶」は、元文3年(1738)に宇治の永谷宗円が初めて創案したもので、従前の「黒製」の茶(渋茶)に対して「青製」⁽³²⁾と呼ばれている。茶葉を蒸して発酵を止める抹茶作りの製法にヒントを得たもので、さらにこれに「黒製」⁽³³⁾で行われていた揉捻を加えた、いわばミックス製法を行っている。この結果、茶葉の表面にひび割れ・断裂が多く生じて乾燥が進むとともに、茶葉の表面が硬化していないので煮出さずとも湯に浸すだけで多くの成分が浸出してくるようになった。茶の色も発酵をすぐに止めるために鮮やかな緑色を留めている。そのために「青製」と称される。もちろん使用される茶葉も、抹茶同様の上等の新芽が使われた。色鮮やかで味のうまみが存分に楽しめる高級茶であった。ただし製造に手間暇がかかる。それゆえに値段も高かったわけである。⁽³⁴⁾

宗円はこの茶を、江戸の茶商・山本山の嘉兵衛に持ち込み、山本山を通して、以後次第に一般に普及してゆくこととなった。寛保2年(1742)に宗

円にこの茶を紹介された売茶翁も大いに感銘を受けたと言われる⁽³⁵⁾。彼が京で辻売りをした一服一銭の茶もこの「青製」の茶と思われる。青製の茶は、宝暦年間(1751~64)には近江(信楽)にも生産が拡大している⁽³⁶⁾。先述の『嬉遊笑覧』の「辻売り煎茶」の小袋入りの茶の記述は、まさに順調に受容され民衆層に広まった証左と言えよう。明和6年(1769)の隠元薬罐の登場は、青製の茶の受容と生産拡大とにまさに符節を合わせたものであったのである。

その後、今の我々の煎茶に直接つながるこの青製の上茶は、何時頃庶民層にまで完全に普及し、品質の劣る番茶(黒製の渋茶)を逆に駆逐していったのであろうか。



図12 三代歌川豊国筆
「忠臣蔵絵兄弟」
(安政6年, 1859)

この問題に関しては資料が少ない。寺門静軒の『江戸繁盛記』(天保3年, 1832)の「茶店」の条には、「当今茶店の盛んなる、亦酒肆と多を争ふ。・ ・ ・竈を開きて、大なる者は高樓華麗、名茶客を待し、小なる者もまた晩茶を奉ぜず。茶瓶茶杯の良、従って知る可し。」と記される⁽³⁷⁾。天保期頃には晩茶(番茶)が茶店から姿を消していたことが推し測れる。画像資料では、茶碗の内部を黄色く彩色して青製茶を表した例があるが、年代的に幕末のものに集中していて、この問題の解決には役立たない。三代歌川豊国「江戸名所百人美女 浅草寺」⁽³⁸⁾が安政4年(1858)、三代歌川豊国「忠臣蔵絵兄弟」が安政6年(1859)(図12)、先述の豊原国周(図11)が慶応元年(1865)である。

ただ、このような状況はさらに早く、19世紀の初め、文化年間に遡ることが文学作品から類推できる。十返舎一九の『東海道中膝栗毛』六編(文化4年, 1807)に興味深い話が記されている⁽³⁹⁾。京から大坂へと、淀川下りの夜船の中で弥次郎が小用を足したくなる。同乗のご隠居の洩瓶を借りるが、暗がりでは洩瓶とお茶を入れる急須を間違えて、急須の中に小便をしてしま



図13 急須(左)と洩瓶(右)
(岩波日本古典文学大系挿図より)

うという話である。さらに続いて急須の小便をめぐるドタバタ話が展開する。洩瓶と急須の形(図13)が比較的類似しているということを前提に成り立つ話なのである。急須は煎茶道で使い

始めたもので、上方で先に普及し、江戸では当時は稀なものだった。弥次郎が急須を知らなかったであろうことは、一九も文中で説明しているが、大きさもまるで違っており、現実的にはこじつけに近くていささか無理がある。ただ、そのこじつけ話が話として成り立った背景には、大事な要素として、急須で入れられるお茶の色と、洩瓶の中のものの色がよく似ているということがあろう。そのために、読者は、そのあと急須の中の小便はどうなるのだろうと、誰かが間違えて飲んでしまうのではと、はらはらすることになって、可笑し味も生じてくるのである。当然、一九もそこを狙って話を構成していることは疑いない。文中には茶の色については一切触れられていない。江戸ならば裏長屋に住むような住人のレベル、『膝栗毛』を読むような当時の庶民層の間でも、お茶の色と言えば黄色い色(黄緑色)なのだという共通の認識があって、それが常識化していて、お茶と言えば黄色(黄緑色)とみなが受け取ってくれるという前提があって始めて話が成り立つわけである。もはや庶民層でも、茶の色は番茶のようなこげ茶色だという認識では無くなっていったと考えられるのである。永谷宗円の創案以来、ほぼ70年を経て、青製の茶は完全に浸透し、その普及が完了したことを、『東海道中膝栗毛』は証明してくれているのである。

4. 茶屋・一般家庭内の隠元薬罐

第2章では隠元薬罐の画像資料としては、お仙の鍵屋のもののみを検討

した。本章では、その他の茶屋や一般家庭の画像も検証して、隠元薬罐の状況を幅広く整理しておきたい。

現在のところ、宝暦期(～1764)以前とされる茶屋の図で、隠元薬罐を描いた図像は見当たらない。引き続いて明和期に入っても、同様に描かれていない例が見受けられる。明和2年(1765)の『絵本江戸紫』

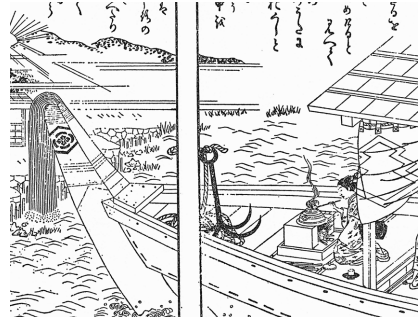


図14 浪花禿帚子「絵本江戸紫」
(明和2年, 1765)

『絵本江戸紫』には、船中の甲板上にしつらえた釜の図もあり、釜で茶を作っている。横に茶碗と茶托が置かれ、若い娘が柄杓で釜の中身を汲みあげている(図14)。明和4年(1767)刊行の『絵本千年山』では、幔幕を張った花見の情景の横に、長床几があり、端に四角いへっついと釜がある。蓋はいわゆる鍋蓋で、隠元薬罐はない。やはり横に茶碗を乗せた茶棚がある。明和5年(1768)

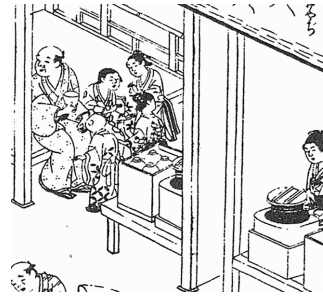


図15 臥仙「絵本軽口福笑」
(明和5年, 1768)

の『絵本軽口福笑』では、小屋掛けの隅に2軒の茶屋の釜が並んで見える。蓋はやはり鍋蓋で隠元薬罐は見えない(図15)。明和5年以前では隠元薬罐無し(41)の図のみである。

江戸の茶屋での隠元薬罐の初現は、管見の限りやはり谷中・鍵屋の明和6年(1769)となる。ただ、谷中は江戸としてはある意味場末であり、隠元薬罐が実際に最初に用いられた場所であるとはとても言い難い。より繁華な場所で出現したものではなかろうか。さらに遡る可能性は高く、今後画像が見つかることも想定しておきたい。

他方、明和6年前後に並ぶ時期と考えられる画像中に隠元薬罐を描く例

は、お仙関連以外でも確認することができるようになる。一筆斎文調筆の「みなとや」(図16)は明和後期の⁽⁴²⁾



図16 一筆斎文調筆「みなとや」(太田記念美術館蔵)

名前不詳の茶汲み女の後ろに、隠元薬罐の乗った茶釜が見える。勝川春章筆の「品川八景・八ツ山の秋月」(図17)は、明和末から安永初のもの。簡素な小屋掛けで、中にへつついと茶釜が見え、薬罐が乗っている。横に茶棚がある。中央下の客の持つ茶碗の中は黄色に近い色で彩色されている。もしこの色が、茶の色を写實的に描いたものであれば、茶の色を表す最古の資料、同時に上茶の色を表す最古かつ重要な資料となる。ただし、この茶碗は左の床几の側板と重なった位置に描かれ、側版もやはり同様の黄色に近い色で塗られている。そのために、側版を塗るつもりで、茶碗の中まで注意せずに塗ってしまった可能性を捨てきれない。残念な資料と言える。ともあれ、隠元薬罐がほぼ同時期のほかの



図17 勝川春章筆「品川百景・八ツ山の秋月」(ベルギー王立美術歴史博物館蔵)



図18 山東京伝「寓骨牌」(天明7年, 1787)

茶屋にも出現していたことは確実である。

一般家庭の台所の画像で、隠元薬罐を描くものも少ないながら存在する。喜多川歌麿筆『台所美人図』が特に著名であるが、時期は寛政期(1789~1801)まで下が⁽⁴⁴⁾る。天明年間(1780年代)の例も存する(図18)。逆に時代が遡る資料としては、江島其碩の浮世草紙に例が見える。『浮世親仁形気』(享保5年, 1720)⁽⁴⁶⁾と『商人家職訓』(享保7年, 1722)(図20)で、ともに台所の4つ以上横並びの竈の端に隠元薬罐が見える。そのすぐ横に棚があり、碗が並ぶの



図19 江島其碩「浮世親仁形気」(享保5年, 1720)



図20 江島其碩「商人家職訓」
(享保7年, 1722)

で、是が飲茶のための設えであることは確実である。これは、元文3年の永谷宗円の青製茶創案よりもさらに早い。ともに裕福な商家の様相であり、おそらくは17世紀から飲まれていたいわゆる唐茶ではないと思われる。従って、隠元薬罐の用法は、青製の茶の普及後に始まったものではなく、本来は別製法の古様の煎茶に先行して用いられていたものと思われる。これはまさに隠元禅師が将来した唐茶の飲法から継承されたものと言えよう。⁽⁴⁷⁾つまり、茶屋における隠元薬罐の出現は、隠元薬罐の「使用開始」を示すものではなく、上茶(青製茶)の「広範な普及の開始」を告げるシンボルの存在だったのである。

い。19世紀(江戸後期)の図であるが、たとえば大量の茶を用意する、あるいは一日中飲む分の茶を一度に作る必要があるといった状況下では、小さな土瓶ではなく大きな葉罐で直接茶を作っていた状況を想定できよう。

5. 草双紙(黒本)『狸の土産』^{いえづと}の成立年代

最後に余論ではあるが、お仙と深い関係を持つ草双紙(黒本)に言及しておきたい。東京大学総合図書館霞亭文庫に蔵する『(金時)狸の土産』⁽⁵⁰⁾である。内容は坂田金時が別世界に行って化け物退治をする荒唐無稽な筋立てのものである。笠森稲荷とお仙が主要な題材・舞台として使われ、まったくお仙人気に便乗して作られた作品と言える。金時が夢のお告げを受けて、笠森の松の下を掘ると茶釜が飛び出すところから物語が始まる(図23)。第1章で述べた「とんだ(飛んだ)茶釜」という言葉が文中に用いられる。化け物たちはこの笠森の松の下に掘った穴の中の世界に住む。お仙本人も、笠森稲荷からの連想で「笠森お千狐」の名で化け物の一人として登場する。最後に金時は捕獲した茶釜を笠森稲荷に勧請して祀り、話が終わる。

霞亭文庫本は、増摺されたためか題簽から初版刊行年の部分が削られていて、発行年を確定できない。木村八重子氏は、作品中に「とんだ(飛んだ)茶釜」はあるものの「葉罐に化けた」の語句を含んでいないことを根拠に、お仙が突如引退した明和7年2月以降の刊行と見る必然性はなく、お

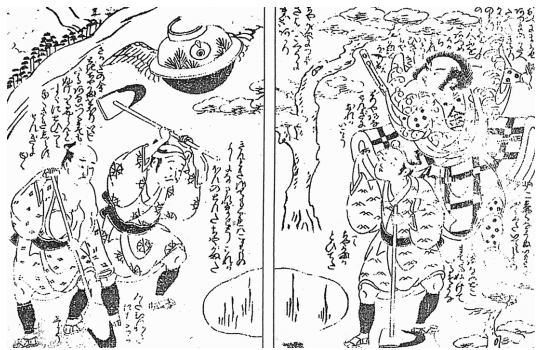


図23 とんだ茶釜(「(金時)狸の土産」より)



図24 お仙団子を持つ
笠森お仙狐

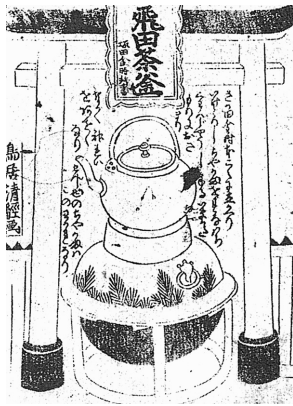


図25 飛田茶釜
(隠元薬罐を乗せる)

仙の全盛期に初版が製作されたと考察され⁽⁵¹⁾た。一方、松原哲子氏は、同じ村田屋刊行の別種の本の題簽との比較考察などから安永元年(1770)を刊行年に比定され、説が分⁽⁵²⁾かれている。

まず挿図を見ると、7丁目のお千狐の図(図24)では、背景に笠森稲荷の鳥居が描かれ、すぐ横に丈の低い木立が描かれる。この描法はかなり特色的で、木村氏が類似例として指摘する太田南畝の『阿仙阿藤優劣⁽⁵³⁾弁』(明和6年)の挿図のものよりは、むしろ一筆斎文調筆の鍵屋の図(図4)の木立の表現によく似ている。画工の鳥居清経は自身が浮世絵師でもあり、この文調の絵を下敷きにしていることが充分考えられる。もちろん文調画では茶釜の上に隠元薬罐が乗っている。また最後の10丁目の挿図(図25)の笠森稲荷に祀られた茶釜も上に薬罐を乗せている。これもまた隠元薬罐の姿に他ならない。従ってこの本の初版制作年は、お仙の活躍期の中で考えても間違いなくかなり後半であり、明和6年を遡ることはほぼ考えられないと言える。

この作品の中身自体は、大きく笠森お仙の人気の依存しており、お仙自身も主要人物(お千狐)として登場する。初版制作が松原氏が想定する安永元年(1772)まで下るとすると、すでにお仙の突然の引退からまるまる2年以上が経過している計算になる。茶屋の人気看板娘は新たに次々と登場する。お仙の知名度も、購買者のお仙に対す

る記憶も興味も関心も次第に薄れてゆく。時間が経過すればするほど、つまり話題性が乏しくなるほど、お仙に大きく依存したこのような刊行物は販売リスクが増加したであろう。安永元年説には疑問符がつく。従って、初版刊行は、お仙引退の騒動がまだ人の口の端に頻繁に登っていたであろう明和7年(1770)と見ては如何であろうか。木村氏が指摘する通り、文中に「薬罐に化けた」の句はない。しかし作品中で狐はお仙に「化けて」いるわけで、「化けた」は含まれている。「薬罐」もちゃんと挿図に登場する⁽⁵⁴⁾。いくらなんでも現役の人気茶屋娘、しかも嫁入り前の娘を化けもの扱いして描くことは憚られたであろう。むしろお仙が現役の間よりは引退騒動の最中の方こそが絶好の販売のタイミングであり、お仙は売れ行きに貢献したのではなかろうか。

また、明和7年のお仙の突然の引退は、事実は結婚引退であったことが解明されていて、現在の我々は真相を理解できている。しかし、明和7年時点では、人びとには真相は一向に伝えられておらず、むしろ失踪というに近い受け止められかたをされていたであろう。そこに、稲荷の鳥居前だから狐なんだ、お仙は狐が化けていたんだ、だからドロンしたんだというまことしやかな真相解明説を出せば、格好の話題提供になったであろう。従って、この作品の刊行は明和7年(1770)の2月以降が最も有力とみたい。それはお仙の知名度が失踪騒動の結果、最も上昇した時期でもあったのである。

以上、前章までとは直接につながる話ではないものの、これも茶文化研究の一環と捉えてあえて言及した次第である。

ま と め

第4章まででは、江戸期の庶民の茶が隠元薬罐の出現をその象徴として、18世紀半ばに質的に大きく変化したことを述べた。永谷宗円が1738年に創案した茶は、前後30年ほどの時の流れの中で徐々に広まり、隠元薬罐とい

う象徴的器物を伴って、庶民レベルに定着していった。『膝栗毛』をはじめとする数多くの資料からは、19世紀の初頭には、その普及定着を想定することができた。それ以後、我々の現在の茶に到達するまでには、まだ幾許かの変遷が求められるのであるが、その具体的過程は次稿で考察したい。

注

- (1) 橋本素子「中世における茶の生産と流通—茶業の成立」『日本近世国家の諸相』（1999年）、同上「鎌倉時代における宋式喫茶文化の受容と展開について—顕密寺院を中心に—」『寧楽史苑』第46号（2001年）、同上「室町時代農村における宋式喫茶文化の受容について」『中世史研究』第27号（2002年）
- (2) 佐藤要人『江戸水茶屋風俗考』（1993年）45頁、「浅草二十軒茶屋」
- (3) 延享から寛延にかけての1740年代の例として、西村重長筆『風流三幅対のうちやまとちや』（図2）がある。佐藤註（2）前掲書118頁。平凡社『茶の湯絵画資料集成』（1992年）206頁、図119
- (4) 佐藤註（2）前掲書160頁「水茶屋美人伝」
- (5) 佐藤註（2）前掲書160頁
- (6) 夢中散人に、明和7年時点での解釈がある。夢中散人寢言先生『辰巳之園』（日本古典文学大系「黄表紙洒落本集」所収、1958年）318頁。ただし、「薬罐に化けた」の方の解釈は正しいとは思えない。なお、「薬罐」の意味解釈であるが、もし今後の研究によっても明和6年を遡る隠元薬罐が見出されない場合は、「薬罐」は茶釜の上に忽然と出現した隠元薬罐を指していて、お仙が薬罐に化けたという意味だった可能性も出て来よう。
- (7) 原色浮世絵大百科事典編集委員会『原色浮世絵大百科事典』第4巻（1981年）、36頁参照。
- (8) 大蔵永常『広益国産考』（安政6年、1859）。中村羊一郎『番茶と日本人』（1998年）32頁
- (9) 狩野博幸『清長と錦絵』（『日本の美術』364、1996年）第9図。菊地貞夫『浮世絵』（『原色日本の美術』第17巻、1968年）193頁、図42
- (10) 高橋誠一郎『春信』（1965年）第78図解説
- (11) 大阪市立美術館カタログ『日本人と茶』（2002年）第171図
- (12) 喜田川守貞の『守貞謄稿』には「茶瓶は茶を煮る銅器なり。形下図のごとし。（やかんの形で、下腹部に鏑（歯）がせり出す形）この周りに歯のなきを薬罐と云ふ。江戸にては歯のあるなしに薬罐と云ふ。」と述べる。この場合の薬罐は江戸用語ということになる。喜田川守貞『近世風俗誌（二）』（1997年）58頁。
- (13) 註（9）に同じ

- (14) 一筆斎文調には、隠元薬罐があるものとなないものがあり、写實的に忠実に描き分けているものと考えられる。佐藤註(2)前掲書162頁上並びに下右。平凡社『茶の湯絵画資料集成』(1992年)208頁、図123。註(7)前掲書36頁、図77。西山松之助・竹内誠『江戸時代図誌』巻5(江戸三)(1976年)図139。内藤正人「出光美術館蔵肉筆浮世絵」『古美術』89号(1991年)図11
- (15) 佐藤註(2)前掲書175頁。森島中良「寸錦雜綴」(「日本隨筆大成」第1期第4巻所収、1975年)189頁
- (16) 『青楼惚多手買』(寛政9か、1797)では、図9のように吉原に向かう日本堤の茶屋にも見える。洒落本大成編集委員会『洒落本大成』第19巻(1983年)344頁。この隠元薬罐の常態化とそれに伴う飲茶法の変化については別稿を用意している
- (17) 『日本隨筆大成』第二期第7巻(1928年)268頁
- (18) 佐藤註(2)前掲書184頁。安村敏信監修『浮世絵図鑑』(別冊太陽214、2014年)32頁
- (19) 惣堂閑人『寛保延享江戸風俗志』(「続日本隨筆大成」別巻8所収、1982年)19頁
- (20) 大枝流芳『青湾茶話』(東洋文庫「日本の茶書」2所収、1972年)87頁
- (21) 森川許六『風俗文選』(日本古典文学大系『近世俳句俳文集』所収、1964年)331・332頁。同上(岩波文庫『風俗文選』所収、1928年)114頁
- (22) 北條団水の「日本新永代蔵」(正徳3年、1713年)では、大坂の秋甫という銅の商売人についての記事で、「秋甫工夫のうへ、茶釜の蓋を切り抜かせて、其うへに銅の茶瓶をかけて茶釜の湯気にて、自然と茶瓶の水ぬるみて、何時にても大勢の手代共の、月代の湯わざと湧かさずして不時の用事を達する事・・・」と述べている。同様のアイデアを考えた人は多くいたのではなからうか。日本名著全集刊行会「浮世草子集」(日本名著全集第1期第9巻、1928年)568・569頁
- (23) 一般家庭の例であるが、歌川国芳「七婦久人 弁財天」では、長火鉢の上の薬罐の蓋をあけて、茶焙じて軽く焙じた茶葉を入れる場面が見られる。町田市立国際版画美術館カタログ『江戸の華 浮世絵展』(1999年)66頁、図版43-4
- (24) 山田新市『江戸のお茶一俳諧 茶の歳時記』(2007年)285頁
- (25) 喜多村信節『嬉遊笑覧』(岩波文庫所収、2005年)362頁
- (26) 佐藤註(2)前掲書167頁
- (27) 大枝註(20)前掲書87頁
- (28) 入間市博物館カタログ『こだわりの湯のみ茶碗』(2002年)29頁。また、文献では、近松門左衛門の「博多小女郎波枕」(享保3年、1718)に、「茶出し(茶瓶)に唐茶摘み込む。注ぎ出す色はうすけれど・・・」とある。唐茶は釜

- 炒りするために茶葉の表面が硬化していて、成分の浸出が抑えられるために色が薄くなるのである。近松門左衛門「博多小女郎波枕」（日本古典文学大系『近松浄瑠璃集上』所収、1985年）326頁
- (29) はるかに後世の例であるが、式亭三馬『人間万事虚誕計』後編（文化13年、1813）では、家庭内で長火鉢の上に、陶磁器製の釜と隠元薬罐を乗せ、別の土瓶でお茶を淹れている図がある。高田衛・原道生編『叢書江戸文庫19（滑稽本集一）』（1990年）389頁。
- (30) 入間市博物館カタログ『お茶と浮世絵』（1997年）36頁
- (31) 洒落本の『当世穴知鳥』（安永6年、1777）に見える茶屋・みなと屋の看板にも「せんちゃ」とあり、釜に隠元薬罐が乗せられている。「せんちゃ」の用例は、お仙の活躍期に近い1770年代にまで遡る。佐藤註（2）前掲書159頁。
- (32) 吉村亨・若原英式『日本の茶—歴史と文化』（1984年）206～208頁。中村註（8）前掲書148頁
- (33) （財）静岡総合研究機構『お茶からアジアを考える』（1998年）144～146頁
- (34) それまでの日本に、いわゆる「煎茶」が無かったわけではない。中国製の釜炒りの煎茶は入っていたが、味が当時の日本人好みに合わなかったようで、広く受け入れられるに至っていなかった。
- (35) 入間市博物館註（30）前掲カタログ、展示関連年表
- (36) 註（35）に同じ
- (37) 寺門静軒『江戸繁昌記』（東洋文庫所収、1976年）258頁。（新日本古典文学大系100『江戸繁昌記・柳橋新誌』所収、1989年）313頁
- (38) 入間市博物館註（28）前掲カタログ43頁。町田市立国際版画美術館註（23）前掲カタログ123頁、図93-4
- (39) 十返舎一九『東海道中膝栗毛』六編（日本古典文学大系所収、1958年）328・329頁
- (40) 浪花禿帚子『絵本江戸紫』（日本名所風俗図絵別巻、1988年）229頁
- (41) 臥仙『絵本軽口福笑』（武藤禎夫『嘶本大系』第17巻所収、1979年）14頁
- (42) 稲垣進一『図説浮世絵入門』（2011年）41頁
- (43) 東京国立博物館カタログ『ベルギー王立美術歴史博物館所蔵浮世絵とタピスリー』（1995年）図版25。原色浮世絵大百科事典編集委員会『原色浮世絵大百科事典』第5巻（1980年）58頁、図188
- (44) 入間市博物館註（30）前掲カタログ10頁。註（43）前掲書52・53頁、図171
- (45) 茶振舞いをする場面で、隠元薬罐が竈の釜の上に乗っている画像である。山東京伝『寓骨牌』（天明7年刊、1787年）九ウ『山東京伝全集』第1巻所収（1992年）。ほかに森島中良「絵本纂怪興」（寛政3年刊、1791年）『森島中良集』（『叢書江戸文庫』32所収、1994年）
- (46) 江島其碩『浮世親仁形気』二之巻（日本古典文学全集37『浮世草子集』所

- 収, 2000年)474頁
- (47) 第3章の註(33)を参照
 - (48) 註(39)前掲書22頁。西山松之助・竹内誠『江戸時代図誌』巻5(江戸三)(1976年)158頁, 図361。また, この発端の部分の本文では, 「どびんのちゃ」という語が見える。
 - (49) 三谷一馬『江戸商売図絵』(1995年)96~97頁
 - (50) 木村八重子校注「(金時)狸の土産」(新日本古典文学大系83『草双紙集』所収, 1997年)147~160頁
 - (51) 註(50)前掲書148頁
 - (52) 松原哲子「富川房信画『とんだ茶釜』考」『実践国文学』第60号(2001年)
 - (53) 佐藤註(2)前掲書165頁
 - (54) 註(6)における筆者の想定が正しければ, お仙は薬罐に化けたわけで, 「薬罐に化けた」は挿図に示されている。
 - (55) お仙を鼻屑した太田南畝も最後まで真相を知りえなかった。佐藤註(2)前掲書171頁